

書評

小沢俊夫編『世界の民話』(全二五巻)
関敬吾・荒木博之・山下欣一監修『アジア
の民話』(全一二巻)

大林 太良

近年における口承文芸研究の盛況の一つの現れは、世界各地の民話が組織的に紹介されるようになったことである。一九七五年以来刊行されている三弥井書店の『世界民間文芸叢書』(一九八〇年末までに十二冊既刊)のほかに、新たに『世界の民話』と『アジアの民話』の二双書が公刊された。そしてこれらは、いずれも口承文芸、ことに昔話の専門家の編集ないし監修になるものであり、たんに読物として楽しいばかりでなく一般的に言って質的にもすぐれたものである。またこれ以外にも、たとえば中国(漢民族および少数民族)の民話については、すぐれた翻訳集が数冊公けにされている。

このようにして、我が国の研究者は、容易に全世界からの民話を展望し、利用できるようになった。これは極めて重要なことである。自国語で全世界にわたる膨大な資料が利用できるということは、この分野の研究が、従来の枠をこえ、新たな地平に達することを可能にする基本的な条件の一つだからである。この意味で我々はこれら双書の編者、監修者、訳者に感謝の念を禁ずることはできない。

ここでは、これら双書のうち『世界の民話』と『アジアの民話』を取上げることにした。

『世界の民話』はドイツの有名な *Zeitschrift der Weltliteratur* 双書をもとにしている。この『世界文学の昔話』双書は、戦前一九一五年から一九四〇年ごろまで三十数巻がフォン・デア・ライエンの監修下に刊行され、戦後はまた新たな語巻が発行されている。戦後発行のものなかには、中国のように戦前のものの再版もあるが、多くは新たに編集刊行されたものである。この『世界の民話』は、戦後発行されたものを底本としている。しかし戦後刊行されたものなかでも訳されなかった本もあるし、

また訳された本も、全訳ではなく、抜萃訳である。邦訳は小沢俊夫氏をはじめ、ドイツ文学の畑の人々によって行われた。

つまり、『世界の民話』全二五巻は、第一期として、一 ドイツ・スイス、小沢俊夫訳、二 南欧、安達茂之、沼田俊則訳、三 北欧、榎田照男訳、四 東欧Ⅰ、飯豊道男訳、五 東欧Ⅱ、小川超訳、六 イギリス、川端豊彦訳、七 アフリカ、中山淳子訳、八 中近東、鈴木満訳、九 アジアⅠ、笹谷雅訳、一〇 アジアⅡ、小沢俊夫訳、一一 アメリカ大陸Ⅰ、中村志朗、青山隆夫訳、一二 アメリカ大陸Ⅱ、関桶生訳の一二巻よりなり、昭和五二年度の日本翻訳出版文化賞を受賞している。第二期は、一 三 地中海、小沢俊夫訳、一四 ロートリンゲン、関桶生訳、一五 アイルランド他、中村志朗訳、一六 アルバニア他、飯豊道男訳、一七 カピール他、竹原威滋訳、一八 イスラエル、小川超訳、一九 パンジャブ、関桶生訳、二〇 ヨーカサス、小沢俊夫訳、二一 モンゴル他、小沢俊夫訳、二二 インドネシア他、小沢俊夫訳、二三 パプア・ニューギニア、小川超訳、二四 エスキモー他、関桶生訳の十二巻のほか、二五 解説編が小沢俊夫氏の著でつけ加え

られている。

各巻は、話の訳文のほかに小沢氏による解説と、巻末にA T番号一覧表がつけられている。小沢氏の解説においても、話の特徴の指摘や日本の昔話との比較などが試みられているが、第二五巻として、同氏の書き下ろしの解説篇がつけられていることは、一つの大きな貢献である。一般読者の理解をふかめるためばかりでなく、昔話の形式やモチーフの比較研究に関心をもつものにとっても、大きな利便となっている。

また、『世界の民話』双書で有難いことは、従来我が国であまり知られていなかった地域の民話が多量に紹介されたことである。たとえば、コーカサスはユーラシア大陸の東西交渉史上重要な地位を占め、また古い文化を保存する地域としても文化史上重要なところである。しかし、この地域の民話は今まで吉田敦彦氏や私がオセツ族のナルト叙事詩を日本神話の比較資料に用いたような例外を除いては、ほとんど紹介されていなかった。この地域に一卷がさかれたことは大きな喜びである。なお、コーカサスのグルジア人に関しては、最近、片山ふえ訳『コーカサス民話集 森の精』（東洋文化社、京都、一九八

〇年）がメルヘン文庫の一冊として刊行された。また『バプア・ニューギニア』の巻について、同地域はこれまでそもそも調査が不充分であって、近年になって伝承がある程度概観できるようになりつつあるという段階である。それだけに新しい資料にもとづいたこの集成は、K. A. McElhanan, Legends From Papua New Guinea, Summer Institute of Linguistics, Ukarumpa, Papua New Guinea, 1974.とともに、オセアニアの神話や民話の研究者にとつて貴重な資料集であると言つてよい。

このようにこの双書が果た役割の大きいことは今更言うまでもない。しかし、ドイツ語圏をとり扱う巻以外は、ドイツ語からの重訳であること、また語学的に堪能であっても、必ずしもその地域や民族の専門家でない人たちによつて邦訳されたことによる制約のあることもまた事実である。その例として中国の民話の場合を見よう。

『アジア』所収の中国の民話は、リヒアルト・ヴィルヘルム原著のものに邦訳である。原書には、口承の民話のほかに古文獻から訳出された説話も多数収められているが、本訳書では、原書巻末の註に口頭伝承によると記してあるものにはば限定し

て、選択採録されているのは、適切な処置であったと言つてよい。口頭伝承による原書註に明記していないもの（第五、一〇、一三、一五—一八話）も、関連した話は原書註にもふれているように古典に出ているが、恐らく口承のものをとつたのである。しかし、第一話「ノチャ」は、原書註にもあるように「封神演義」と『西遊記』にもとづいたものである。

欧文の中国民話集では、固有名詞などが、ローマナイズされ、あるいは欧訳されているのは仕方ないが、邦訳に当たっては、できるだけ漢字にもどすことが読者に親切であろう。古くから漢字文化圏に入ってきた人物や地名が少なからず登場しているからである。たとえば、第一〇話「ヤン・エルラン」は楊二郎、ウーイー山は武夷山のことであり、第一話「ノチャ」は哪吒のこと、リ・チンは李靖、チンチャは金吒、ムチャは木吒である。第一二話「月の妖精」に出てくるヤウ皇帝は堯帝、ホウ・イーは后羿、クンロン山は崑崙山、チョン・オは嫦娥のことである。また「ヤスピス湖の皇太后に会つた」（三三頁）とあるのは「瑤地のほとりて西王母に会つた」ことで

ある。また Kassibaum を「かしわの本」と訳してあるのは(二三三頁)「桂の木」とすべきであろう。第一四話「八人の神様」は、Die Acht Unsterblichen の訳であるが、ドイツ語の Unsterblicher 英語の Immortal は、中国語の仙の訳語として慣用のものであり、八仙と訳すべきである。そしてこの話に登場するリ・チェ・グアイは李鉄拐のことである。なお、第一一話「ノチャ」で太乙真人が登場する。『封神演義』でも太乙真人という形で出ているから、それでもよいが、これは原文に Der Grosse Eine とあるから、ドイツ語原文に従えば、太一という表現が適当であろう。もっとも太一も太乙真人も同一神格ではあるが。

もちろん、他の巻においてもその地域に不案内なために、不適當な訳をしている場合が散見する。二つだけ例を挙げると、『パプア・ニューギニア』の巻の四六頁に、「きょうは酒盛りをしよう」と言った女の言葉が出てくる。原書 Ulla Schild, Märchen aus Papua-Neuguinea S. 36. 1977 の *Wir wollen ein Fest machen* と書かれている。この Fest を酒盛りと訳すのは不適當である。なぜならば、オセアニアでは、インドネシアからマレー人によって椰子酒がニュー

ギニア西端に導入されたことを除けば、酒は知られていなかったからである (Herbert Tischner, *Kulturen der Südsee* : 46, Hamburgisches Museum für Völkerkunde und Vorgeschichte, 1958)。ここでは「宴会を開こう」くらいに訳さなければ正確でない。

また『アジア』の二四一頁の中ほどに「サユヤシの実を取りに出かけた」とある。原書 Ernst Ulrich Kraatz, *Indonesische Märchen*, S. 248, 1973 には、*„gingen... um Sago zu gewinnen* とある。サユ椰子はココ椰子とちがいで、実ではなく、幹を伐り倒し、幹の心をかき出して澱粉をとって食用にするのであるから、「実を取りに出かけた」というのは誤訳である。

この種の問題については、他の双書の例もふくめて、あとでまた取り上げることにして。

いずれにせよ『世界の民話』の刊行によって、信頼度の高い資料にもとづいて、民話の世界大的な鳥瞰が可能となったことは、研究者にとって大きな福音である。比較研究、モチーフや形式の分布研究が我が国においても従来以上に容易になった。しかし、それだけにこの双書の初期の配本分

においては、原書に出ている採集地名や所伝の民族名を明記していないものがあるのは残念である。ここでそのいくつかを補っておけば、『アジア』のシベリアの部のうち、第四三話から第四七話までがオスチャク族(解説にはオストヤークと読んでいるが、オスチャクのほうがよい)、第四八話から五三話までがヴォォグール族のものである。また『アジア』のインドネシアの部のうち、第七四話から第七九話までがジャワ島、第八〇話はマドゥラ島、第八一―八二話はロンボク島、第八三話から第九〇話まではスラウエン(セレベス)島、そして最後の第九一、九二話はロティ島のものがある。

『アジアの民話』全一二巻は、『世界の民話』とは異り、既成の双書を訳出したものではなく、アジア・オセアニアの諸地域から選ばれた個々の民話集を邦訳したものである。その構成は、一 ルドゥ・ウー・フラ著、古橋政次・大野徹訳『ビルマの民話』二 玄容駿著、朴健市訳『済州島の民話』三 コックスウエル著、渋沢青花訳『北方民族(上)の民話』四 コックスウエル著、渋沢青花訳『北方民族(下)の

民話』、五 パーカー著、サミュエル淑子訳『セイロンの民話』、六 ミッチェル著、古橋政次訳『ミクロネシアの民話』、七 フアンスラー著、荒木博之訳『フィリピンの民話』、八 ストークス著、アダムス保子訳『インドの民話』、九 伊藤清司編訳『中国の民話』、一〇 カー著、山下欣一訳『パプアの民話』(付、ファイジン著、フィジーの民話)、一一 モナ・バロン著、山下欣一訳『ベトナムの民話』(付、フリソン著、藤本黎時訳、ラオスの民話)、一二 田中於菟弥・上村勝彦訳『パンチャタントラ』である。

各巻は民話の訳文のほかに解説、A T 番号一覧、地図を付する形式をとっているが、『済州島の民話』や『パプアの民話』のように A T 番号一覧を欠くもの、『ミクロネシアの民話』や『ベトナムの民話』のように解説を欠くものもある。また『ビルマの民話』の第二部、『済州島の民話』、『中国の民話』、『パンチャタントラ』のように原語ないし非ヨーロッパ語から訳出されたものもあるが、他は英文の民話集からの重訳である。依拠した原典の選択は大体妥当であって、『北方民族の民話』、『セイロンの民話』、『フィリピンの民話』、『インドの

民話』、『パプアの民話』、『パンチャタントラ』の原典はいずれも古典的評価を得ているものであり、『ビルマの民話』や『済州島の民話』、『ミクロネシアの民話』は最近のすぐれた民話集によっている。

このように『アジアの民話』も、我々の知識の空隙をうめるのに大きな貢献をしている。たとえば、『ミクロネシアの民話』を例にとっても、ミクロネシア全域にわたるパラソスのとれた民話集がはじめて日本語で利用できるようになったのである。また『パンチャタントラ』にしても、他の諸巻とは異って現代の口承伝承集ではないが、東西の昔話に大きな影響を与え、世界の説話の歴史において注目すべき地位を占めるこのインドの古典が、今までのように英訳本からの重訳ではなく、原語から直接邦訳されたことの意義は極めて大きい。

このように、『アジアの民話』双書も重要な集成である。ことに『世界の民話』が、すでに存在している外国の双書を訳出したのと違って、日本の学者が、独自に原典を選択して作った双書という点でも特色があり、またその適切な選択には監修者の高い識見を窺わせるものがある。ただ例外として、『ベトナムの民話』については原典の選

択は適切とは言い難い。なお同巻に付せられた『ラオスの民話』は古典的評価をもつ民話集を訳したものはあるが、ここでラオスと言っているのは十九世紀の用法で、実は今日のタイ国北部を指している。『ラオスの民話』という標題は誤解を招き易い。このことに一言断っておいたほうがよかったろう。

ところで、このように近年、双書あるいは単発で多くの民話集が邦訳されたため、なかに同一民族あるいは地域について数種が公刊されたところもある。ベトナムはその一例である。

ベトナムの民話については、『世界の民話』では『アジア』と『インドネシア他』に相当数の話が収められ、また『アジアの民話』では『ベトナムの民話』の巻がある。そのほか最近では社会思想社の教養文庫では矢野由美子訳『ベトナム民話集』(一九七九年)と、同朋舎から、グエン・カオ・ダム、チャン・ベト・フォン著、稲田浩一、谷本尚夫編訳の『原語訳ベトナムの昔話』(一九八〇年)が出ている。第二次大戦中やベトナム戦争中に数種のベトナム民話集が出ていたから、ベトナムの民話についてはかなりの量が日本語でも利用できること

になったわけだ。

しかし遺憾な点もみられないわけではない。たとえば、矢野訳には竹内幾之助氏の解説がつけられているが、同書の原典が何であるのか記されていない。英語の原典から訳したのではないかという印象を受けるが、明記してはしなかった。同朋舎のものは、ベトナム人の昔話ばかりでなく、少数民族の昔話も含まれているのは有難いが、民族名の表記に問題がある。たとえばモン族とは何であろうか？恐らくムオング(Muong)族の別名 Mon を指すのではないかと思われるが、明らかでない。もしそうだとすると、より一般的に用いられているムオング族の名称を用いたほうが、親切であろう。またムン族の名が二九八頁に出ているが、これが何を指すのか不明である。さらに蒙古族に至っては、何かの誤りとしか思えない。また、内容に関しては、矢野訳で地質学者(九二頁)となるのは、文脈からみて風水師 Geomancer の訳読であろうし、同朋舎のものに、「銅で鍍したドンスン蛙の模様」(二九八―二九九頁)とあるのは、ドソン文化における銅鼓などについている蛙の装飾のことに違いがあるまい。

しかし、矢野訳と同朋舎本は、固有名詞などの表記はよくできてきている。これが『世界の民話』や『アジアの民話』では欠陥が多い。ことにチャ行を表すロの綴りの発音が誤っている。たとえば、『世界の民話』の『インドネシア他』一九九頁のトラン・ヌグアイエン Tran-nyen はチャン・グエンである。また『アジアの民話』でもトルウン姉妹(九頁)、トルン・トラック(一七二頁)と記されているが、これは微側(チュン・チャク)姉妹のことである。またハン王朝とかハン三世(四四頁)とあるのはフン Huen を英語読みしたのであって、正しくない。これらのような歴史上の人物は、もとの漢字を用いて雄王と記したほうが誤解が少いだろう。また『アジアの民話』では、ジェニー・マー(三頁)を始めとして、ジェニーの語が何回も出てくるか、これに英語の genie(精霊)のことである。一般の読者はジェニーというベトナム語があると勘違いするかも知れない。また同書で『ヒスイ皇帝ヌゴック・ホアン』(一〇頁)とあるのは道教の玉皇上帝のことであり、ゴック・ホアン Ngoc Hoang(ヌゴック・ホアンではない)は、玉皇のベトナム読みである。この独訳 Dar Jade-Kaiser を『世界の

民話』で天の皇帝ヤーデと記しているのは(『インドネシア他』二二四頁)、何のことが判らない読者も出てこよう。

私が、この書評で、中国やベトナムの民話の欧文テキストからの邦訳について、苦言を呈したのは、これらの訳書や訳者にケチをつけつもりでは毛頭ないし、まして知ったかぶりをしたくて書いたわけではない。

実は私自身同じような経験をもっている。『アジアの民話』の『ビルマの民話』が出て間もなく、大阪外語大の大野徹氏から一九七八年七月三日付書面で、次のような教示を得た。ビルマ連合(五頁)はビルマ連邦とすべきであり、ヤウ族(一五頁)ヨー族、ガ・ポケ(二七六頁)はンガ・ポウと発音すべきで、タマン・チャール(二七八頁)はタマン・チャーと読むべきである。また、第一部原書の英訳者Kとはルルー・キンゾーの Kinn の頭文字をとったものであり、また私が解説中に同定できないでいた民族名(二九二頁)については、ラワン族はヌン Ngun 族、ミヤウン・シー族はメオないし苗族、ルウエラ族はワ族、ラッチ族はラン族、ロン・ウオウ族はマル族、カイン・ワ族(正確にはザイン・ワ族か?)

はアツィ族のことであるという指摘である。この機会を利用して、訂正と補足を行っておきたい。また大野氏の好意に感謝の意を表したい。そしてこのような批判が学界において活発になることを私は希望している。

今後世界世界の諸地域から、欧文あるいは他の文明国語で発表されたテキストにもとづく重訳が公けにされる機会は多いであろうし、またそれは必要なこともある。しかし重訳という制約にも拘らず、高い質の

『南島歌謡大成』（全五巻）

久しく待望された『南島歌謡大成』全五巻は、沖繩編（下）をもって昭和五十五年八月二十日に先結した。各巻の内容は今さら説明するまでもないが、一言すると、第一巻沖繩篇（上）、第二巻沖繩篇（下）、第三巻宮古篇、第四巻八重山篇、第五巻奄美篇となつてゐる。

資料を提供できるにはどうしたらよいか、を私は問題にしているのである。幸い、近年における我が国の地域研究全般の進展は、戦前には考えられなかったような地域についても多くのすぐれた専門家を輩出させている。そこで、このような専門家に、公刊前に目を通してもらうのも一つの方法であろう。出版社に対しては、このような目的のための期間と経費を今後考慮に入れてもらうことを希望したい。

（おおばやし たりょう・東京大学）

狩 俣 恵 一

これは南島を、奄美諸島・沖繩諸島・宮古諸島・八重山諸島の四地域に分けて編んだもので、それぞれの地域による歌謡集であることを明示するだけでなく、各諸島の歴史・民俗・言語等の背景から考えても最も妥当な方法であると思われる。

しかも全巻の編集に当たっている外間守善博士は、慎重にもそれぞれの巻の編者に各諸島の出身者を充てているのである。そ

のことは、この『南島歌謡大成』が単なる南島全般を覆う歌謡集であるという性格のものではなく、各諸島に根差した歌謡を、各々の特色を失うことなく収録しようという編者の意図を示すものである。

更に、今一つの特色としてあげられることは、呪詞から叙事へ、そして叙事から叙情が生まれてくるという外間博士の文学史観によって全巻が成り立っていることである。そのため、歌謡集であるにもかかわらず、歌われない呪詞までも包括される結果となっている。

すなわち、歌謡資料集という枠を超えたものとはなっているが、それ故、ウタの発生及び展開ということについても考えさせられる資料集となっているのである。

二

さて、各巻の編者・概要を紹介することから始めることにしよう。

第一巻沖繩篇（上） 編者外間守善 玉城正美

沖繩諸島で記録されたオモロ・琉歌以外の呪詞・古謡を収載してある。ミセセル（二〇首）・オタカバ（二〇二首）・ティルググチ（二二首）・マジナイゴト（一首）の